

しっかり休まないと、 よい仕事はできない

研究テーマ

18世紀前半に上演されたイタリア・オペラの台本を研究しています。

研究の道へ進んだきっかけ

大学4年生の時はバブルの最終年だったので、男子学生の就職は完全な売り手市場で、教室ではバツとしなかった同級生たちも連休前に一流企業の内定をもらい、夏休みには会社の費用で温泉や海外旅行に行っていました。一方で女子学生の就職は今以上に厳しく、秋口まで走り回って何とかメーカーの内定を獲得するという状況でした。私はそれを見て「企業社会で偉いおじさんのご機嫌を取って生きていくのは無理だ」と感じて大学院に進学しました。要するにモラトリアムです。

座右の銘

しっかり休まないと、よい仕事はできない(イタリア人の教え)

研究とプライベートの両立で工夫していること

イタリア人を見ていて感心するのは、彼らがプライベートを大切にしていることです。彼らにとってアフター5やバカンスは基本的な人権ですので、定時に帰れるように集中して仕事をします。彼らは「しっかり休まないと、よい仕事はできない」と考えているのです。ミラノに住む知人は「日本人はダラダラ仕事をするので、一緒にやりにくい」とこぼしていました。日本ではいまだに「長時間職場に残っている人＝頑張っている人」という信仰が残っていますが、そういう考えに流されず、効率的に仕事を進めたいと思います。難しいことですが。

研究者になってよかったと思うこと

おそらく文系研究者の一部にだけ許されることでしょうが、何といても「上司の顔色をうかがわずに仕事ができること」です。

また、教育の場で若い人の成長を見ることができるのは、予想外の役得でした。自分は年老いていくばかりですが、若い人はどんどん立派になって巣立っていきます。

人生の転機になった一冊／学生に薦めたい一冊

エドワード・サイード『知識人とは何か』
知識人は、強大な権力を持つ者の側ではなく、弱者の側に立たなくてはならない、と主張するサイドは超クールです。知識人に限らず、働いていれば「長いものに巻かれる」というプレッシャーは常に襲ってきますので、権力に魂を売らずに生きていくためのガイドブックとして必携です。

未来の研究者へ一言

大学3年生で私がイタリア文学研究室への所属を決めたとき、当時の教授は「この門に入る者は、金銭への欲を捨てよ」と言いました。それから四半世紀を経て、若手研究者を取り巻く状況はさらに悪化しています。他に選択肢があるのなら「お前はこっちに来るな」と言いたいところですが、この道しかないと思ったのであれば、どうか倒れず走りぬいてください。

中川 さつき
NAKAGAWA Satsuki

京都産業大学 文化学部 准教授
専門分野：イタリア文学

略歴

1992年3月 京都大学文学部卒業

2002年3月 京都大学文学研究科博士課程修了
博士(文学)

2005年4月 京都産業大学文化学部に着任



My Hobby ペンギン観察

私が研究しているオペラは日本では上演されないため、ヨーロッパまで観に行くことになります。上演は夜ですから、日中の時間潰しに動物園に行くと、日本では見られない光景に出会うことができて楽しい。たとえばオランダの動物園では身長185センチくらいのお父さんたちが、ものすごいスピードでベビーカーを転がしていました。またウィーン動物園はもともと宮殿の一部なので、喫茶室はシャンデリアがあつたりして超豪華なのですが、ペンギンの給餌は「飼育係が高さ3メートルの崖の上からイワシをバンバン投げる」というワイルドなものでした。ベルリン動物園の猛禽類のケージには、エサである「ぶつ切りの小鳥」が普通に転がっていてキョッとしました。日本であ

ればこういうものは子供の目から隠すのでしょうか、ドイツでは自然界の現実を見せるという方針なのでしょう。動物園での楽しみ方も展示方法も、それぞれの国の考え方が現れていて興味深いものです。

